

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

【図書紹介】『問いと答え ハイデガーについて』
ギュンター・フィガール著（齋藤元紀・陶久明日香
・関口浩・渡辺和典監訳、法政大学出版局、二〇一
七年）

著者	山本 英輔
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	15
ページ	73-73
発行年	2019-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00021887

【図書紹介】

『問いと答え ハイデガーについて』

ギンター・フィガール著（齋藤元紀・陶久明日香・関口浩・渡辺和典監訳、法政大学出版局、二〇一七年）

山本 英輔

ギンター・フィガールは、テュービンゲン大学、フライブルク大学（フッサールおよびハイデガー講座）の教授、ハイデガー協会会長を務め、現在、ドイツのハイデガー研究の重鎮である。一九四九年生まれの彼は、フォン・ヘルマンやオットー・ペゲラーたちの次の世代に属すると言つてよい。ハイデガーから直接教えを受けたり、親交をもつたことはないが、それだけに、ハイデガーの哲学から一定の距離を保ちながら、より自由に解釈を展開するタイプの学者である。

本書には、そのフィガールが一九九五年から二〇〇七年の間に発表した論文とエッセイが収められている。原題は、*Zu Heidegger Antworten und Fragen* である。副題をそのまま訳せば、「答えと問い」である。普通、対話の場合、問いがあつて答える、という順番が頭に浮かぶのであるが、その順番がおそらく意図的にひっくり返されてい

る。「解釈する」ということは、その本質上、答えることである」（五頁）という、いささか謎めくようなことを語る。彼は、ハイデガーのテキストが答えであり、しかも強力な答えであるという事実を受け止めることから本書を発させる。フィガールによれば、ハイデガー自身、他の哲学者や作家のテキストを解釈し、また自らの思索を解釈として反省した哲学者であつた。そうであるからこそ、なおさら、そうしたハイデガーによる解釈＝答えを批判的に検討することが必要となる。では「問い」はどうなるかというところ、テキストにおいて究明された事象を問うことになるのである。おそらく、フィガールの論考は、ハイデガー哲学の遺産というものを、事象への問いへと向けて思索を促そうとする試みとして理解することができるであろう。

本書は、ハイデガーに関連するものだが、現象学、アリストテレス、プラトン、宗教の問題、ニーチェ、解釈学や翻訳の問題、形而上学批判、ユンガーと、主題が多岐にわたる。本会会員の齋藤元紀氏らベテラン・中堅の研究者が監訳者となり、東京のハイデガー研究会の若手研究者が各論文の翻訳を行なった。フィガールの論述内容を理解して日本語に訳すことは、けつして容易なことではない。本書は、数多くある彼の著作のなかで、日本語の訳書としては、二冊目なのである。